

軍 事 史 学

第 58 卷 第 4 号

卷 頭 言

石井菊次郎の同盟論

戸部良一

戦前に駐仏大使、外相、駐米大使、枢密顧問官等を歴任した石井菊次郎は、外交の第一線を退いた後、外交官としての自らの経験と外交史の研究に基づいて『外交餘録』（岩波書店、一九三〇年）と題する日本外交論を上梓した。そのなかに軍事同盟を論じた一章がある。石井によれば、同盟とは、横浜からマルセイユまで（当時は言うまでもなく海路）同行する二人の旅客が、途中どちらか一方が強盗や悪漢に襲われた場合、他の一方はこれを助けて共同抵抗する、という約束をしたものに似ている。強盗や悪漢に襲われない限り、二人の間に何ら特別の関係はない。マルセイユ到着後は、無関係となる。したがって、同盟国間に親密な「親類関係」を見ようとするのは、「同盟の實際に迂遠なる謬見である」と石井は言う。

このように同盟をドライに見る石井は、同盟義務不履行の問題を深刻に捉えた。「同盟条約成功の為には双方が之に満足して、双方が之を誠実に守るの決意あるを必要条件とする」と彼は述べる。この点で、日英同盟は最良の同盟であったと石井は評している。一九三〇年代後半に入つて日独同盟論が唱えられるようになると、石井はそれを鋭く批判した。石井は、当時の国際政治の形勢から、日独接近に反対すべき理由はないと指摘する。だが、ドイツはフリードリヒ二世以来、国際的な約束を無視し、締約相手国を自国の利益のために操縦しようとする不実な同盟国であった。そうした国民性と行跡を有するドイツと同盟を結ぶのはいかなものか、と石井は論じたのである。

その石井が厳しく非難したのは一九三八年九月のミュンヘン協定である。石井によれば、フランスはチェコに対する同盟に違反し、イギリスはフランスに対する義務を履行しなかった。対独宥和による平和は「チェコ見殺の平和ではないか」と石井は主張する。こうした同盟義務不履行の事例から、石井は次のように結論づけた。もし同盟を結んでいなければ自力自衛に勤しんでいたはずなのに、不実な国と同盟を結んでいたがために、約束された援助を空頼みにして、致命的結果を招くことになってしまふのだ、と。「恐るべきは空虚なる国際同盟である」（石井菊次郎遺稿『外交随想』鹿島研究所出版会、一九六七年）。

（防衛大学校名誉教授）